

令和8年度

男女共同参画に関する
小学生・中学生の作文

入賞作品集



主催 日立市・日立市教育委員会

最優秀賞

私の将来の夢

宮田小学校

六年

鉄谷

あやと
絢斗

私の将来の夢は公認会計士になることです。きつと小学生だと、公認会計士がどのような仕事なのか分からない人も多いと思います。公認会計士とは、会社のお金の流れを調べたり、正しく管理されているかを確認したりして、社会の経済活動を支える大切な仕事です。

私の家族もそれぞれ会社で働いています。私は会社がどのようにして利益を出し、その利益から給料が支払われているの不思議に思いました。気になって調べていくうちに公認会計士という仕事を知り、「こんな大切な仕事があるんだ」と驚きま

した。そして、私は将来この仕事に就きたいと思うようになりました。

最近ではAIの技術が大きく進歩しています。そして、公認会計士も将来AIに代わられる仕事だと言われています。しかし私はそうは思いません。確かに公認会計士はたくさん計算する仕事なので膨大な計算の速さや、数値の正確さという点ではAIにかなわないかもしれません。でも、会社の大切なお金を任せてもらうには、人の信頼や信用が必要です。それがAIにはできない人間の強みだと思います。なので、私は人から「この人なら安心して任せられる」と思ってもらえる公認会計士になりたいです。

私は昔から計算が得意ですが、確認不足で計算ミスをするがありました。そのため最近のテストでは、必ず何度も見直しをするようにしています。また、普段からあいさつや礼儀を大切にし、人の話をよく

聞くようにしたいと思います。勉強だけでなく、人として信頼されることも大切だと思うからです。

私は、公認会計士は会社だけでなく、その会社で働く人たちの生活も支える仕事だと思っています。会社のお金が正しく管理されていなければ、働く人や取引先の人たちが困ってしまいます。そのため、大きな責任のある仕事ですが、その分やりがいも大きいと思います。

将来は資格を取るためにたくさん勉強が必要だと思います。難しいこともあると思いますが、あきらめずに挑戦したいです。そして、知識だけでなく、人の気持ちも大切にできる公認会計士になりたいです。その夢を叶えるために、これからも努力を続けていきます。



優秀賞

将来の夢

成沢小学校

五年

新嶋

菜々美

私の将来の夢は、子どもの成長を見守り、笑顔いっぱいになれる保育士になることです。子どもたち一人ひとりの気持ちによりそう、優しく接することが出来る保育士になりたいと考えています。

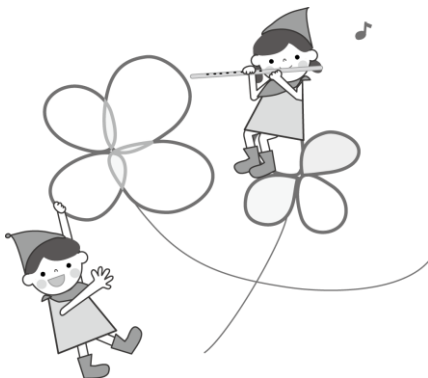
私がこの夢を持つようになったきっかけは、家に七つ下の妹がいることです。妹が生まれたとき、体はとても小さく、自分ではまだ何もできませんでした。私はその姿を見て、「私が守ってあげたい」と強く思いました。それから私は、お母さんの手伝いをしながら、妹の成長をずっと近くで見ってきました。

最近、その妹の成長を感じて、とても嬉しかった出来事があります。それは、妹のトイレの練習です。妹はもともとうちがなかなか出ないタイプで、いつも苦労していました。少し前まではオムツの中でしかできなかったのですが、最近になってようやく、トイレの便座に座って成功させることが出来るようになったのです。私は妹がやる気になってくれるように、工夫をしました。トイレに行くのをいやがるときは、優しい声掛けをして、上手にできた時はたくさんほめてあげました。妹がにこにこ笑って嬉しそうにしている顔を見たとき、私はよりそった声掛けができて本当によかったと心から思いました。

この経験を通して、保育士はただ子どもと遊ぶだけでなく、子どもの大切な成長を見守り、応援する仕事なのだと分かりました。そして、そのためには二つの大切なことがあると学びました。一つ目は子どもの

不安な気持ちにしっかりとよりそう優しさで、二つ目はその子の状態に合わせた「声かけ」の工夫です。また、子どもの体や心の仕組みについての正しい知識もたくさん必要になります。

夢を叶えるために、私は今からできることを始めています。まずは一番近くにいる家族によりそった声掛けをすることです。そして学校生活では、困っている人に進んで声をかけることを意識しています。将来は、妹がトイレを成功して一緒に喜べた時のように、子ども達の小さな成長と一緒に喜び、笑顔になれる保育士になりたいです。



優秀賞

私の将来の夢

塙山小学校 六年

おおくぼ
大窪 ほのみ

私には、将来の夢がある。「小説家になる。」という夢だ。

小説家という夢を持ち始めたのは、小学五年生頃のことだった。「物語の続きを考える」という国語の授業があった。そのときに、私は初めて物語を書いたのだ。そして、書き終わった用紙をお父さんお母さんに見せた。すると、「本を書くのが上手だね。」「とっても面白い。」と言ってくれた。私の小説家という夢は、そこから始まった。そのたった一言で、私の今までなかった夢ができた。

それから私は、その小説家という夢をか

なえるために、私ができることは何かと考えた。「知識・集中力・想像力」この3つが必要だと思った。

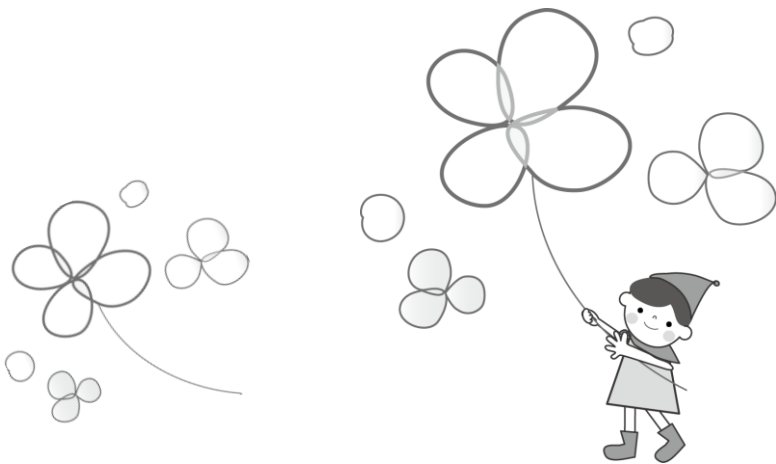
まず、知識を得るためには、今ある勉強はもちろん、社会のこともよく知るべきである。けれど、社会に出るにはまだ少し早いから、まずは勉強をがんばっていいこうと思う。勉強の他にも、新聞を読んだり、ニュースを見たりしたい。

次に集中力だ。集中力は特に必要だと思う。けれど、私は大好きな読書は何時間もしていられるが、苦手な勉強はあまり続かない。そこで「何時間勉強する」と時間を決めていいこうと思う。いきなり長時間だと嫌になってしまうから、少しずつ時間を増やしたい。

最後は、想像力だ。なぜ想像力が必要かという、いろいろな物語を書くときに役立つからだ。想像力を高めるために、いろいろな事を体験していいこうと思う。これで、

知識も高めることができると考えた。

そして、知識・集中力・想像力を高めながら、少しずつ小説を書いていきたい。私の書いた小説が、誰かの心を動かしたり、誰かの夢につながったりしたらいいなあと思う。そのために、今できることを全力でがんばりたい。



佳作

わたしのしよ来の夢

水木小学校 三年

佐藤 千彩希
さとう ちさき

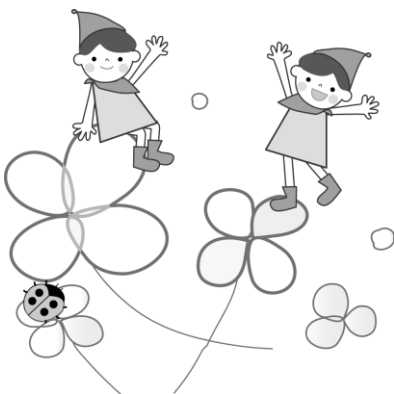
わたしのしよ来のゆめは、「ヘアメイクアップアーティスト」です。自分の家で、サロンを開きたいです。二かいが自分の家で、一かいがサロンにします。十時に店を開くので、それまでに赤ちゃんをほいく園におくって行きます。へやは三つあります。メイクのへやとリラックスするへやとかみの毛をセットするへやです。かみの毛をセットするへやのおくには、ペットをおあずかりするへやも作ります。わたしは、ペットづれのひとも、体が不自由な人も、赤ちゃんづれの人も、かわいくなりたい男性も、おじいちゃん、おばあちゃんも、どんな人でも引きうけます。なぜかと言うと、

さべつをしたくないからです。お母さんから、世界のまじしい国では、女の子は、学校に行けないとか、男の子は、キッチンに入ってはいけけないなどの多くのさべつがあると聞きました。わたしは、それを聞いて、よのなかからさべつがなくなり、せんそうもなくなり、みんなびようどうにしあわせに生きてほしいと思いました。そのため、だれでもこれるサロンを、開きたいと思いました。

ヘアメイクをするとみんな、自しんがつかます。わたしも、七五三でヘアメイクをしてもらったとき、かがみを見てうれしい気持ちになりました。またお友だちとハロウィンメイクをしたとき、自分でおぼけの口をほっぺにかいて、「とても上手にできたね。」と、お友だちにほめられてうれしかったです。

メイクをするほうも、メイクをされるほうも、自しんがつかます。これはすてきな

仕事だと思って、わたしはヘアメイクアップアーティストになろうと思いました。ヘアメイクアップアーティストになるためには、色のべんきよう、かみの毛のべんきよう、メイクのべんきよう、けいえいのべんきようなど、たくさんのべんきようをしなくてははいけません。そのためにたくさんどりよくをしていきたいです。



佳作

書く楽しさを伝えたい

大久保小学校 五年

高橋 たかはし
尚 なお

わたしには、かなえない夢があります。それは、お習字の先生になってお教室を開くことです。お習字を始めたきっかけは、お母さんの「字が上手だと頭が良く見えるよ！」の一言でした。この時のわたしの夢が「頭の良いミニーちゃんになりたい」だったので、すぐに習い始めました。

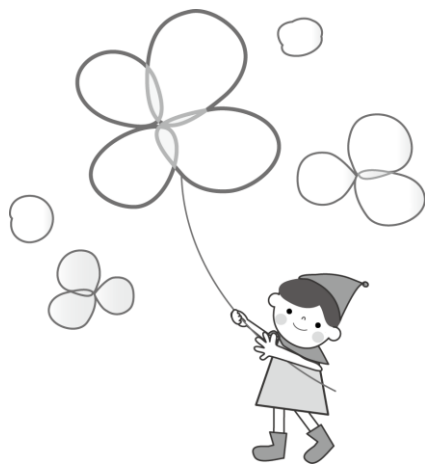
ようち園の時から一週間に一回、書道教室に通っています。お教室に広がるぼくじゅうの香りが好きです。白い半紙をさすると心が落ち着きます。集中スイッチが入ります。文字のバランスを考えて書くのがとてもむずかしいです。書き順や「とめ」「はね」「はらい」が正しくないと、きれいな字

が書けません。平がなは、漢字より少し小さく書くのがポイントです。いつもお手本とにらめっこをして同じく書けるように、細かい所に気を付けて書いています。半紙いっぱいビシッと決まった時は、すごく気持ちがいいです。先生からもほめてもらえて最高の気分になります。次はもっと上手に書くぞっと自信になります。

お習字の良い所は、美しい字が書けるようになるだけではありません。自分の気持ちを自由に表現することもできます。テレビで見た書道パフォーマンスもちょう戦してみたいです。

お習字を続けていると上手に書けなくてやめたい時があります。そんな時は、先生になってみんなに字の書く楽しさやお習字の良い所を広めている自分のすがたを想像してがんばっています。先生になるには、しはんの資格が必要です。いっぱい練習をして、いっぱい表現力をみがいて先

生の資格をとります。わたしはお習字が大好きです。たくさんの人にお習字の良い所を伝えられる明るく楽しい先生になりたいです。



佳作

人を助けられる強い人に

成沢小学校 五年

やまもと
山本 蒼汰
そうた

ぼくには、ずっとちゃんとしたしように来
の夢がありませんでした。ゲームをするの
が楽しくて、友達と遊ぶのも楽しくて、学
校も楽しい。そんな毎日をすごして、しよ
う来何になりたいかを考えたことがあま
りありませんでした。

ぼくが小学三年生になったとき妹が「し
よう来はけいさつかんになりたい」と言っ
て、剣道を始めました。それを見て、ぼく
も一緒に剣道を始めることにしました。最
初は、しよう来の夢があつたから始めたわ
けではありません。ただ妹と一緒にやって
みようと思つたのがきっかけでした。

剣道では、竹刀のふり方だけではなく、

まずあいさつや礼ぎの大切さを教えても
らいました。練習の前後にはきちんとあい
さつをして、相手に礼をします。最初は当
たり前のことだと思つていましたが、剣道
を続けていくうちに相手を大切にする気
持ちが大事なのだと分かつてきました。

剣道では大会にも出るようになりまし
た。試合で負けると、とてもくやしくて、
もっと強くなりたいと思いました。負けた
くないという気持ちで練習をがんばるよ
うになり、できなかったことが少しずつで
きるようになると、とてもうれしくなりま
した。剣道を続けることで、わざだけでは
なく、あきらめない気持ちや人としても少
しずつ成長しているような気がします。剣
道を習つて良かったと思つてます。

そんなぼくがしよう来について考える
ようになったきっかけがあります。ある日
ぼくが生まれる前に起きた東日本大しん
さい、三月十一日のつ波の映像をY o u T

u b eで見ました。たくさん町のつ波に
おそわれている映像を見てとても苦しく
なりました。本当にこんなことが起きたの
かと、信じられないくらいでした。
その後、しんさいのあとにたくさんの人
が協力して、町をふつこうさせていったこ
とも知りました。大変なことがあつても、
力を合わせて前に進んでいく人たちを見
て、ぼくもだれかの力になれる人になりた
いと思いました。

今は、まだしよう来の仕事は決まってい
ません。でも、ぼくはしよう来、こまつて
いる人や苦しんでいる人を助けられる、強
い人になりたいです。そのために、これか
ら剣道を続けて、体だけではなく心も強
くしていきたいです。そして、どんなこと
があつてもあきらめず、人のために行動で
きる人になりたいです。



佳作

世界中をわくわくさせるクリ
エイター

油縄子小学校 六年

なかむら
中村 たくま
拓慎

私の将来の夢は、ゲームクリエイターになつて、世界中の人が夢中になれるゲームを作ることだ。将来は、とにかく大好きなゲームに関わる仕事がしたい。

この夢を持ったきっかけは、初めて自分の力だけでロールプレイングゲームをクリアしたことだ。何度も失敗しながらもあきらめずに挑戦し、最後のボスを倒して、エンディングが流れた時の達成感と感動は、今も忘れられない。「私もいつか、こんな風に人の心を動かす世界を作り出す側になりたい」と強く思った。

昔は「ゲームは男の子のもの」というイ

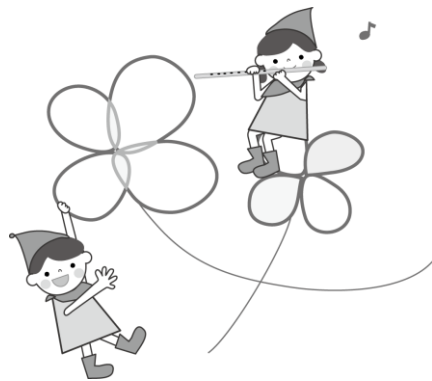
メージがあつたかもしれない。しかし、今のゲームは違う。性別や年齢に関係なく、誰もが同じようにわくわくして楽しめる。性別によつて「向いている」「向いていない」と決めつけるのではなく、好きなことに誰もが挑戦できるのが、ゲームの世界の素晴らしいところだ。

夢をかなえるために、私は今、学校の勉強を頑張っている。プログラミングはもちろん、一見、ゲームとは関係がないと思える教科も大切だ。例えば、理科の勉強はキャラクターが飛び降りる時の落下速度など、リアルな動きを作るのに必要になる。そう考えると、学校で学ぶすべての教科に無駄なものは一つもない。だから、どの教科からも逃げずに頑張りたいと思う。

世の中には、性別を理由に夢をあきらめてしまう人がいるかもしれない。けれど私は、男の子だから、女の子だからということにとらわれず、誰もが自分のやりたいこ

とに向かって真つすぐ進んでいける社会になつてほしい。

私も自分の可能性を信じて、将来は世界中の人に胸が高まるような最高の体験を届けられるゲームクリエイターになりたい。



最優秀賞

みんなで同じ景色を見るために

十王中学校 二年

こうたか
甲高 海子 うみこ

「男女共同参画」と聞くと、私は最初、男女が平等になることだと思っていました。でも、考えていくうちに、ただ男女を同じように扱うことだけが大切なのではないと思うようになりました。

私は、レディーファーストという言葉を聞くと、女性を大切にする思いやりのある行動を思い浮かべます。実際に、レディーファーストをしてもらうと、私は素直にうれしいと感じます。私は女の子でいたいと思っているの、女性として大切にしてもらうことを嫌だとは思いません。

しかし、私は、「親切にしてもらったら、何かお返しをしなければいけないのかな」と考えました。でも、よく考えてみると、お手伝いや親切は、見返りを求めてするものではないなと思いました。だから私は、何か

を返そうとするよりも、「ありがとうございます」と素直に感謝を伝えることが大切なのではないかと思うようになりました。

こうして考えているうちに、私は「平等」よりも「公平」という言葉が好きなのだと気づきました。人にはそれぞれ違うところがあり、良いところがあります。だから、全員が全く同じになる必要はないと思います。それぞれの良さを生かし、できることを分け合いながらみんなで協力することが大切なのではないでしょうか。

私は、レディーファーストも、そのような思いやりの一つだと思います。「女性だから助ける」のではなく、その人が困っていたら手を差し伸べる。自分にできることがあれば助け、相手にできることがあれば助けてもらう。そうやってお互いに支え合うことができれば、性別に関係なく、みんなで同じ景色を見ることができないでしょうか。

私は、男女共同参画とは、男性と女性を全く同じにすることではなく、それぞれの違いや良さを認め合い、協力できる社会をつくることだと考えます。「自分にできること」

は誰かのために使い、誰かに助けてもらったときには「ありがとうございます」と伝える。そんな小さな思いやりをつないでいきたいです。

それぞれに違う良さがあるからこそ、私たちは助け合うことができます。誰かが一人で頑張るのではなく、みんなで支え合うことで同じ景色を見ることができるよう。そんな社会が私の思う男女共同参画の形です。



優秀賞

浅草で出会った自分らしさ

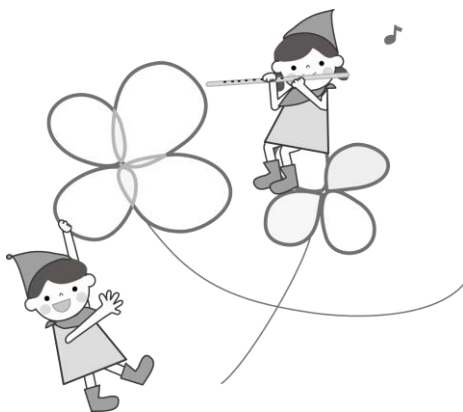
泉丘中学校 二年

高 菲
こう ふう

先日、私は家族と一緒に浅草へ遊びに行った。伝統的な街並みが広がる商店街は多くの人で賑わっていたが、その中で私はある光景に目を奪われた。街を行き交う人々の中に、外見だけでは男性なのか女性なのか見分けがつかない人がたくさんいたのだ。その人たちは、自分の好きな服を着て、好きなヘアスタイルをし、とても楽しそうに浅草の街を歩いていた。最初は「男の人なのか、女の人かな」と一瞬不思議に思った。しかし、その生き生きとした表情を眺めているうちに、私の心の中には別の思いが湧き上がってきた。性別がどちらであって関係なく、その人たちも私と同じように自分の人生を楽しんで生きている一人なんだということだ。周囲の目を気にせず、自分の「好き」を堂々と表現して生きている姿を

見て、私は純粋に「すごいな、素敵だな」と感銘を受けた。この体験を通して、私はこれまでの自分の考え方を振り返ってみた。知らず知らずのうちに、「男の人はこうあるべき」「女の人はこういう服装をするものだ」という無意識の決めつけを持っていた。普段の学校生活でも、「男子だから」「女子だから」という言葉を無意識に使ったり、誰かの選択を決めつけたりしていたのではないかと反省した。世の中には「男らしさ」や「女らしさ」という言葉だけでは括ることができない、多様な生き方がある。性別という枠組みだけで人を判断したり、誰かの選択を否定したりすることは、その大切な「自分らしさ」を奪ってしまうことなのだと気づいた。世の中には色々な人がいて、それぞれに大切な「自分らしさ」がある。大切なのは、自分と違う生き方や表現をする人を排除するのではなく、「それも一つの素敵なかたちだ」と認め合うことである。だれもが外見や性別にとらわれず、好きな姿で胸を張って生きられる社会こそが、本当の意味で誰もが過ごしやすい世界なのだと思う。浅草の商店街で感じた素直な感動を忘れずに、私

も性別にとらわれない柔軟な心を持ち、誰もが自分らしく輝ける社会を作っていく一員でありたいと思う。



優秀賞

「自分らしさ」でつむぐ未来

十王中学校 二年

すずき はるま
鈴木 晴馬

幼い頃、私の大好きな色は赤だった。それは、よく見ていたアニメのスーパーヒーローの色が赤色だったからだ。しかし、小学生の時に田舎のおばあちゃんに、「男の子なのに赤色が好きなんて珍しいね」と言われたことがある。その時は、何でそんなことを言われたのかよく分からなかった。

昔から「男の子は青、女の子は桃色」という何の根拠もない決まり事が身の周りにはあふれている。その一つがランドセルだ。今では、好きな色を選ぶことができるようになったが、少し前までは、「男は黒、女は赤」が当たり前であり、誰もそれに何の疑問も持っていなかった。

家庭における家事や育児のあり方も、その一つだ。昔から「男は外で働き、女は家庭を守る」という性別役割負担の意識が、根強

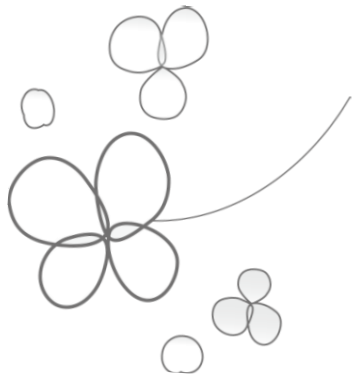
く残ってきた。私の家庭は、両親が共働きのので、父と母と私で家事を分担している。母が仕事で帰りが遅くなる時は、父が夕飯を作ってくれる。父と母で作るメニューが違うが、違っているところがおもしろいし、私はどちらの料理も大好きだ。母も帰ってきたから父の夕飯を食べると「自分以外の人で作ってくれたご飯は美味しいなあ」と喜んでいる。お互いが「家庭での仕事」を担うことで家族全体のきずなが深まっているように感じている。

誰か一人にだけ負担が偏るのではなく、お互いの得意なことやスケジュールに合わせて支え合う。それは、家事や育児を「手伝う」ではなく「共に担う」という意識が重要だと思う。家事や育児は決して女性がする仕事ではなく、そこに暮らす家族全員でお互い得意なことやできるところを担っていくことで、互いを尊重した生活を送ることができる。

人は誰もが、心の中に自分だけの「好きな色」を持っていると思う。それは、青や桃色といった絵の具の色だけではなく、それぞれの選択したい生き方や得意なこと、個性

の色でもある。男だから女だからという理由で、その色を隠したり、選べる道を制限されたりすることはあってはいけない。

男女共同参画とは、決して特別なことではなく、誰もが「自分らしい色」を胸を張って表現できる社会を作ることだと思う。家庭で家事や育児をお互いに尊重し合いながら分担するように、社会全体でも一人ひとりの選択を尊重し合う未来を目指して、まずは自分の頭の中にある思い込みから見つめ直していきたい。



佳作

ボーダーラインのないクラシックピアノ

日高中学校 一年

宇佐美 響一郎
うさみ きょういちろう

私は幼い頃からクラシックピアノを習っています。これまでも発表会だけでなく、ピアノコンクールにも参加してきました。コンクールに向けて練習をしていると、思うように弾けなかったり、本番で緊張したりすることもあります。それでも舞台で自分の音表現することは、私にとって大切な経験です。

そんな私の今いる環境は、男女とは何なのかと考えるなくても良いくらいに自由でありのままです。

ピアノコンクールでは、男女で分かれて競うことはありません。一人の演奏者として審査されます。審査では名前もなく、演奏番号だけが審査員に知られることもたくさんあります。演奏中の姿を見ず、ひたすら

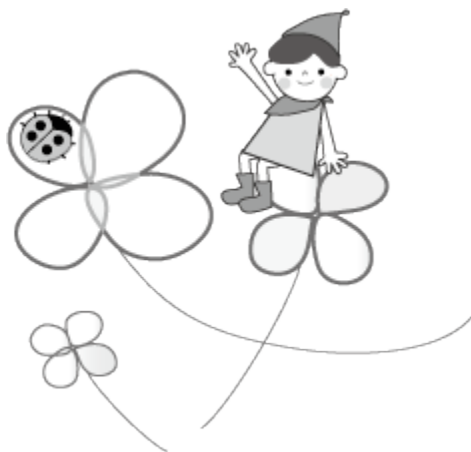
音だけを聴いている審査員もいます。どのような演奏をしたか、どのように音楽を表現したのかということを聴いているのかもしれませんが。

あとは、もしかして驚く人もいるかもしれないのですが、衣装も自由です。男女関係なく、ドレススタイルでもスーツスタイルでもヘアスタイルも自由です。男性で華やかなドレススタイルの人も、女性でかっこよくスーツスタイルの人も、コンクールの時以外はお互いをリスペクトして、クラシック音楽を学んでいる人として関わります。私は、この短い期間だけでも年齢や性別関係なく、たくさんのクラシック音楽の友達ができました。コンクールというと、「人と競うこと」というイメージが強かったのですが、こうして考えてみると、ひとりひとりを心で評価しているのだと思います。もちろん結果は出ますが、それを性別で決めることはないからです。

性別には男女という言葉がありますが、人にはその二つでは分けることの出来ない

さまざまな心があると思います。その人の努力や個性を受けとめてくれる社会だと良いなと思います。

私にとってピアノは、まだまだ勉強中ですが、ちゃんと個性を音で伝えられるように毎日続けて誰かにクラシック音楽を届けられたら嬉しいです。



佳作

「イクメン」は本当にいい言葉なのか

十王中学校 二年

延岡 真依
のべおか まい

世の中には「イクメン」という言葉が存在する。育児を積極的に行う男性のことを表し、一見すれば良い褒め言葉に聞こえるだろう。しかし私は、この言葉に少し違和感を覚えている。なぜなら、母親が育児をしても「イクウーマン」とは呼ばれないからだ。男性が育児をすることだけが特別に褒められるのは、一体なぜなのだろうか。

私の父は住職であり、自宅が職場のため、母と協力して育児に積極的に参加してくれる。そのため、外に勤めに行っている親とは少し違う。日々の送り迎えや学校行事の積極的な参加など、私たち子供の世話をよくしてくれる。

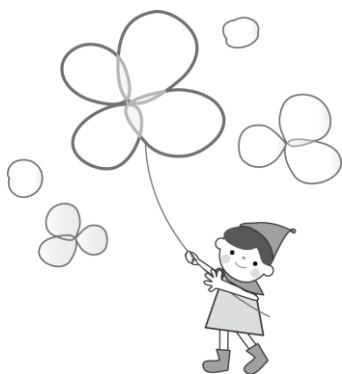
そんなある日、テレビのニュースで「男性の育児休暇取得率が過去最高になった」というものを目にした。番組では、数日間だけ

育児を取り、公園に連れてって子供と遊んだだけで「イクメンだ」と褒められている父親が映っていた。それを見たとき、私は強い不平等さを感じた。私の父のように、毎日当たり前のように子供の世話をしている、外ではなかなか気づかれない。しかし世間では、男性が少し育児に参加しただけで周囲から大絶賛されている。一方女性は、家ことや育児はもちろん、仕事も持ちながら二十四時間体制でやっても、それは当たり前のこととしか思われず、誰からも褒められることはない。この差はあまりにも不公平なのではないだろうか。母親だからやって当然という世間の冷たい視線は、働く女性たちを精神的にも追い詰めているのではないだろうか。同じ親であるはずなのに、性別によって社会からの評価がこれほど違うことに私は強い違和感を覚える。

実際、まだ「男だから」「女だから」と言っただけで、育児に対する古い価値観が変わらないままだ。「男は仕事、女は家庭」という無意識の思い込みが、今も社会全体に根深く残っているからだ。だからこそ、男性が育児をすると珍しがられ、褒められるのだろう。

しかし、裏を返せば、女性ばかりに家事や育児の責任が押し付けられ、結果として女性が社会で十分に活躍できない不平等が生まれている。

だからこそ私は、男性が育児をすることが「特別」ではなく「当たり前」になること、それによって、性別に関わらず互いに負担を理解し、支えあうことが大切だと考える。その実現のため、まず自分自身が家事などの役割を性別で判断せず、気づいた人が自主的に行うようにしていきたい。



佳作

自分らしい選択

十王中学校 二年

村山 ちなみ
むらやま

親戚の集まりで何気なく大人が話していた「男だから」「女だから」という言葉に違和感を覚えました。世代の隔たりが大きいと、価値観の違いに驚く事もあるかと思えます。この事が男女共同参画を考えるきっかけとなりました。

差別や不公平な仕組みなどは無くすべきですが、個人差や伝統を考慮しながらの変化と持続のバランスを保つのは難しいです。例えば、伝統行事だと男女区別があるものは多いです。しかし、昔ながらの良さもあるので一概に無くすべきとは言えません。

そこで私は、男女共同参画とはどこまで何をすべきなのかと思いました。目的は「性別に関わらず、すべての人が個性を活かして自分らしく生きられる社会」の実現です。男女共同参画社会基本法制定から体制は変

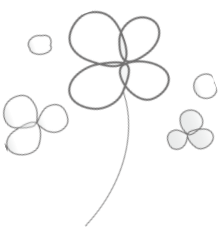
化しています。従来は男は仕事、女は家庭という役割分担が一般的でしたが現在では、共働きの割合が高くなり性別での区別に違和感を持つ人が多いように感じます。身近なもので考えると、確かに制服が選べるようになったり、ランドセルの色が変わりました。男女区別があるものは、制服などの選択肢が広がっているように残すべき所は残しつつ、誰もが自分らしく楽しめるように工夫や選択の幅を広げることが必要なのだと感じました。

他にも様々な働き方が増える中、私は男性や女性に多い仕事をそれぞれ就いている方を見かけて珍しく思った事があります。無意識に役割分担を思い込んでいたことに気づきました。批判などではなくても、珍しく思うこと自体が自分の中に基準があり、見えない壁を作ってしまったているのかもしれないと感じました。仕事に限らず周りの目や同調圧力で、選択肢があるのに選びづらい社会では意味がありません。無意識の思い込みを完全に無くすのは簡単ではありませんが、表面上だけ取り繕うのではなく、まずは自分の中にある小さな気づきを見

しないことから始めていきたいです。

また、この空気感を作ってしまう一つの原因として、私が最初に感じた価値観の違いも関係あると考えました。体制が変化しても人の感覚がすぐに馴染む訳ではないのでどうしてもズレは生じてしまいます。世代によっても、同じ世代であっても、考えは人それぞれ違います。だからこそお互いに「完全に理解すること」を目指すのではなく、まずは話し合いを通して考えを一度受け止めることがこれからの変化の第一歩になると考えました。

作文を書き、男女共同参画について深く考えられました。皆が自分らしく生きるためには、お互いの価値観を認め合い選択肢を広げる事が大切です。対話を諦めず、相手の意思を知ろうとする姿勢を土台として個人の選択を自然に受け止め尊重し、誰もが自分らしく生きられる社会作りに関わって行きたいです。



佳作

男女の家事負担の差について

茨城キリスト教学園中学校 三年

おおくぼ
大久保 琴生

私は家事について日頃から考えていたことを書いてみます。

家事といって私がすぐに思いつくのは、料理、洗濯、掃除、買い物のおつくりですが、母曰く、このほかにも見えない家事はたくさんあるそうで、家計の管理、日用品の補充、自治会への参加、ゴミ出し。また子供がいる家庭になると、子供たちのスケジュール管理、習い事の送迎、役員業務。さらに子供が小さければ、身支度の手伝い、離乳食やミルクの用意、おむつ替え、お風呂、寝かしつけ。介護を必要とする家族がいる家は、もっと多くの家事があることでしょう。

これらの家事の八割は女性が一人でこなしているそうです。こんなにやるべきことがあるのに本当に男性は二割しか家事をしないのかと疑問に思い、身近な人達はどう

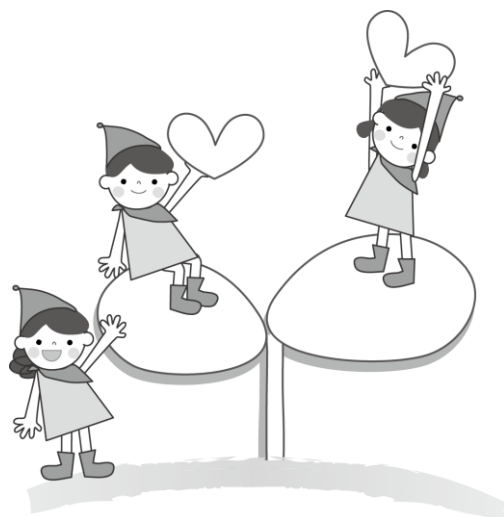
だろうと周りの話を聞いてみると、「お父さんのご飯のほうがおいしい」という友達や、お菓子作りが得意な男友達。他ならぬ私の父も動画を見ながらご飯やデザートを作ってくれます。しかし、見えない家事についてはどうでしょう。料理はするが、片付けが苦手など、掃除や洗濯に関するとなると、途端に手が遠のいてしまう男性が多いように感じます。このように、家事をする男性でも、得意なことや興味があることに偏ってしまう傾向があるようです。

なぜそのような偏りが生じるのか私なりに考えてみたところ、自分が育った環境が影響しているのではないかと思いました。家庭の中で母親が家事をするのが当たり前という環境で育った人は自分も同じように振る舞うのではないのでしょうか。昔と今の共働きの割合を比較してみると一九八十年の共働き世帯は三五・五パーセントに対して、二〇二六年は七三・七パーセントに増加していることがわかりました。私の考えが正しければ、一九八六年代に子供だった男性の六四・五パーセントは、母親がほとんど一人で家事をこなしているのを当たり前

見てきた世代ということになります。その原因かどうか定かではありませんが、男性が女性と同じように家庭科を学ぶようになったのは、一九九三年に中学生になった年代からなのです。そういった背景があることを考えると、一般的に私達の祖父の世代より、父の世代が家事に協力的なことにも納得できます。

共働きの世帯が増え続けている今、私は男女関係なく子供のうちから家の手伝いをしたり、もっと家事に興味を持つ環境の中で子育てをするべきだと思います。さらに、学校などでも男性が家事に参加することへの効果を学べると良いと思います。男性も一緒に家事や子育てに参加していくことで、家庭内における男性の必要性も増し、自然と女性の負担も減らすことができるみんなが暮らしやすい社会になっていくはずですよ。





発行 日立市市民生活環境部女性若者支援課 男女共同参画推進室
〒317-0073 日立市幸町 1-21-1 日立シビックセンター 6 階
TEL : 0294-26-0315
E-mail : josei@city.hitachi.lg.jp



日立市男女共同参画社会
シンボルマーク